



プロフェッショナルになる

私たちの生活のすみずみにまで科学技術が浸透してくるようになった。「オッケー、グーグル！」というコマースが私は大嫌いだが、そのように声で指示しなくても、例えばテレビのスイッチを入れただけで、自動的に部屋の照明が落とされ、画面の視聴に丁度良い環境が設定される部屋なんてのも登場している。スマホはもちろんのこと、IoTとか、車の自動運転とか、AIとか、もはや世の中はそういう時代である。

しかし、これだけ技術が高度化すると、それに伴って専門性も高まり、その結果、専門家であっても、自らの専門領域については極めて高度な知識や技術を持っていながら、専門以外のことがらについては、(例えば同じような分野のことであっても)非研究者と同じレベルの判断しか下せないような「専門家」が増えてきている現状がある。

ここまで時代が進んでしまっている以上、この現状を根本的に改善することがいかに困難であるかは想像に難くないであろう。しかし、根本的な解決は難しいからこそ、とりあえずではあっても、日々流動してゆく状況に対応することのできる人材も必要とされるはずだ。教科書で「身体、この遠きもの」を学習したが、その著者で哲学者でもある鷲田清一さんの文章を引用してみよう。(『哲学の使い方』岩波新書、2014)

*

科学・技術の研究や開発にはそもそも単独ではできないという事情もある。専門を究めているはずの個々のプロフェッショナルは、他のプロ、あるいは他のノン・プロと協同しなければ、何一つ専門家としての仕事をなし

えない。たとえば、情報端末の微細な回路設計を専門とする技術者は、超微細な回路を実現するためには、それを可能にするような材料の専門家と組まねばならない。どんな機能をどんなふうに乗せるかについてシステム設計の専門家と組まねばならない。さらにそれを新製品として実現するためには、さらに別のプロ、たとえば消費者とじかにつながっている営業のプロ、広報のプロ、そしてもちろんコスト計算をしてくれる会計のプロとも組まねばならない。

ここで注意を要するのは、これら協同するプロたちにとって、組む相手はいずれも自分の専門領域からすればアマチュアだということだ。とすれば、ほんとうのプロというのは他のプロとうまく協同作業できる人のことであり、彼／彼女らにじぶんがやろうとしていることの大事さ、そしておもしろさを、きちんと伝えられる人であり、そのために他のプロの発言にもきちんと耳を傾けることのできる人だということになる。一つのことしかできないというのは、プロフェッショナルではなく、たんにスペシャリストであるにすぎないのである。

*

最近、「コミュニケーション力」が重視されるし話題にもなるわけだが、その背景にはこのような時代状況もあるということだ。そして、それはズバリ君たちの課題でもある。日比谷の教室でなされた授業の意味が見えてきたのではないだろうか。スペシャリストではなく、真のプロフェッショナルとなることが、今、求められているのである。